ICT 海外ボランティア会会報

No. 36

2012 年 11 月 3 日（土）

Home page　：http://www.ictov.jp/
e-mail　　：sv@info.nttob.org

目次

◆　巻頭言
「生涯現役・終身学習を目指して！」
当会幹事　肥後　照雄氏

◆　特別寄稿
地雷廃絶日本キャンペーン（JCBL）について
JCBL 代表　北川　泰弘氏

◆　特別寄稿　真藤語録（その１０）
事務屋・技術屋これは方便、企業人たる前に社会人たれ
当会顧問　石井　孝氏

◆　特別寄稿
三度目のバンコク勤務
（株）ミライト・テクノロジーズ
アジア・パシフィック駐在事務所長
山川　博久氏

◆　現地活動の思い出から
カトマンドゥ便り（その２）
当会幹事　須山　勝彦氏

巻頭言

「生涯現役・終身学習を目指して！」

当会幹事
聖学院大学非常勤講師　　肥後　照雄

昨年9月、南米でのJICA・SV活動を終え帰国した。現役時代・退職後を含め海外での仕事・生活40年、海外滞在累計10年、世界約100ヵ国、約400都市訪問した。世界の開発途上国を単身で転々としながら文化、・環境などが異なる厳しい環境の下、中小企業振興、競争力強化の指導・支援で各国の経済・社会の発展・復興に寄与してきた。

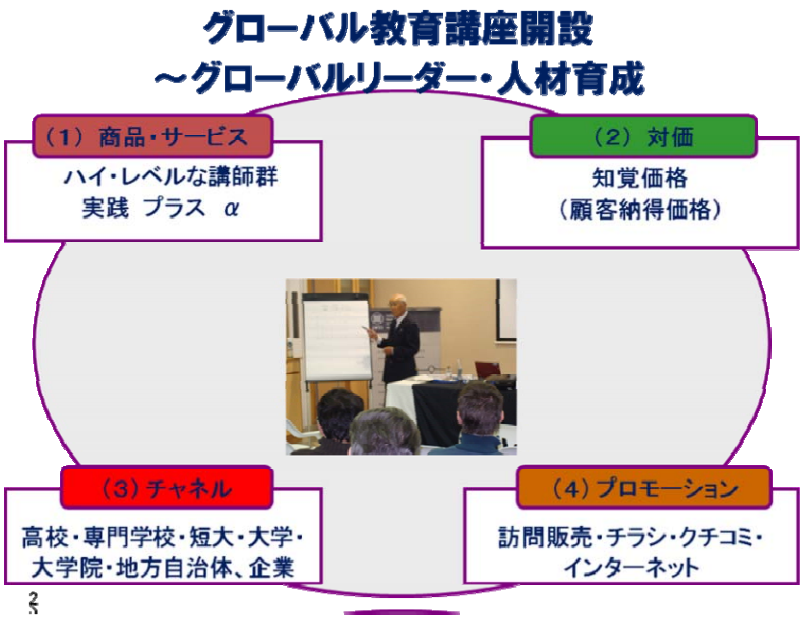
今後も働ける限り働く、社会とかかわり続ける。人と触れ合って、やりがいのある仕事を続けたい気持ちが強い。しかし、残念ながら日本では「年を取った人」はいらない。就労意欲の強いシニア層の受皿となる場所は少ない。蓄積した力の使い道がないのが現実である。急速に進む超少子高齢化時代により生産と需要が減少している状況下、「人生90歳時代」を見据えた高齢書の活用などの動きは鈍い。特に、国土が狭く天然資源が乏しい日本では、知識を蓄え経験を積み、国内外でいろいろ修羅場を乗り越え、鍛えられた高齢者は人的資源になるべき筈である。

柴田博医学博士（桜美林大学大学院教授、生涯現役「スーパー老人」の秘密ほか）は、高齢者の社会貢献活動についての追跡調査研究で、「高齢者は総活動時間が多いほど認知能力が低下しにくいことがわかった」と語っている。
また、「人間の脳は、多くの本を読んだり、教養講座に沢山出席したり、趣味的社会参加が、認知症予防に約立ったという研究はほとんどない」とも言い切っている。要するに、「人間の脳は、インプットするのみでなく、アウトプットしなければ十分活動しない」ということだ。

上記背景から、自ら新事業、「グローバル教育～リーダー・人材を育てる～」講座開設を立ち上げた。現在、稼働に向けての体制つくりに邁進している。同じ志を持ち同様な経験やスキルを有するメンバーと共に、夫々の専門性を活かし、世界中で自らが培った技能と知識、喜びと苦しみを次の若い世代へ伝承したいと考えたからだ。（添付参照）
我々が講師・先生となって必要とする企業・学校に出向き、いずれ世界の舞台で活躍する「グローバル人材」を育てる事業である。これを高齢社会の生涯現役のモデル・手本にしたい。

ただ、過去の現場実践、古い経験・ノウハウだけでは変化のスピードが速い現在社会では通用しない。時代に合った、新らたに求められる知識・スキルを学びなおし、自分を磨いていく終身能力開発を目指し、現在、「放送大学・エキスパート課程」を履修中である。

また、最新の産業理論、知識と技術を会得するため、これらに関連する「セミナー・講演」にも積極的に出席している。過去 20 年間で 125 回参加した。国内の高名・著名な講演家の講演はほとんど聴講している。
これらはいずれも“自己投資・自己啓発”、まさに、“生涯現役・終身学習“の実践である。



特別寄稿

地雷廃絶日本キャンペーン（JCBL）について

JCBL 代表（当会会員）　北川泰弘

私は 1927 年から 1954 年まで 27 年間 NTT のお世話になりました。その後は当時の日本通信協力㈱(NTC) で働かせて頂きました。NTC では海外電気通信コンサルタントと言って、JICA の技術協力で電気通信機器を贈与、海外協力基金（OECF)、世界銀行等の借款で電子交換の電話局を作り、電話回線網を建設する時の設計、工事管理をやっていました。JCBL は国際 NGO なので、NTC での国際経験が役に立っています。

かって 1938 年代に JICA 専門家として働いていたカンボジアの交通・電気通信省からの依頼で、地雷で足を失った職員に義足を提供する NGO「プノンペンの会」を 1992 年に作りました。会長には、初代カンボジア派遣電気通信専門家の輿寛次郎氏になって頂きました。活動資金は NTT、KDD、NHK、郵政省、通信機材・線材製造メーカ、工事業界の個人ベースのご寄付と、その当時始まった郵政省の国際ボランティア貯金の補助金をお願いしました。合計約 3､000 万円が集まりました。

当初は集まった資金で日本の中古の義足を集め、カンボジアに送れば済むと思っていたのですが、切断者の体型にあった義足を作らねばダメだと言うことで、所沢にある国立身体障害者センターの田澤英二先生（当時）のご紹介による若手の義肢装具士を首都プノンペンにある英国の NGO「カンボジア・トラスト」の義肢センターに派遣して、切断者一人々々の体型に合った義足を作成しました。当時「カンボジア・トラスト」は義肢装具士が不足してい

たのです。義肢装具士の派遣は5年目から田澤先生のNGO「HOPE (Humanitarian Orthotics and Prosthetics Endeavor)」に引き継いで10年間続きました。

カンボジアで地雷による犠牲者を支援しようとする日本のNGOは「プノンペンの会」のほかにも、日本国際ボランティアセンター（JVC)、難民を助ける会（AAR)、国連支援交流財団ほか沢山ありました。

犠牲者を支援しても、地雷を無くさなければ犠牲者は減らないと、国際的なNGO「地雷廃絶国際キャンペーン(ICBL)」が1992年10月19日に発足しました。地雷の被害が多いカンボジアでは、カトリックのイエズス会が中心になって「地雷廃絶カンボジアキャンペーン（CCBL)」が発足しました。

「プノンペンの会」の仕事を通じて上記の情報を得た私は、カンボジアの障害者支援、地雷問題の周知に携わっている諸団体に働き掛けて、ICBLの傘下に入って対人地雷をなくそうというネットワークNGO「地雷廃絶日本キャンペーン（JCBL)」を1997年7月19日に設立しました。AARは犠牲者支援は続けるが地雷廃絶は会の趣旨に反するとの理由で、当初は参加しませんでした。当時はNGOに対する理解が低かったので、NTT傘下の会社の役員である私も日本の国防に関わる団体を設立していいものか？NTTからお咎めはないか？と内心危惧したものです。地雷廃絶を叫ぶことは微妙な問題でした。

国際NGOのICBLは、対人地雷廃絶キャンペーンのために必要な活動のやり方、資料の英語版のモデルを提供してくれました。NGOとしての経験の浅い私は非常に助かりました。ICBLは1997年10月に、当時は夢ではないかと言われた「対人地雷全面禁止条約（オタワ条約)」を実現させ、その功績でその年のノーベル平和賞を受賞しました。また、2008年には「クラスター兵器連合（CMC)」と組んで「クラスター爆弾禁止条約（オスロ条約)」を成立させました。JCBLはオタワ条約、オスロ条約に参加するよう日本政府に強く働きかけて日本の参加を実現し、国会に働き掛けて批准を実現しました。現在は国連加盟国193ヶ国の中で、160ヵ国がオタワ条約（対人地雷禁止）を、77ヵ国がオスロ条約（クラスター爆弾禁止）を守ると国連事務総長に公式な約束をしています。

対人地雷、クラスター爆弾を禁止する二つの条約は出来ました。しかし、まだまだやる事が沢山あります。それは両条約に未参加の国々に参加を呼び掛けること。条約に参加しただけで、条約に書いてあることを実行していない国々に実行を迫ることです。例えば地中に埋まっている地雷／クラスター爆弾は条約が効力を発生した日から10年以内に除去することとなっています。それにも関わらず、間に合わない国々が多いのです。地雷／クラスター爆弾による犠牲者に対する支援も条約に規定されています。それにも関わらず、実行が遅れている国が沢山あります。JCBLは日本政府に対して犠牲者支援に力を入れるよう働きかけています。しかし、残念ながら、犠牲者支援のODAによる援助額は地雷／クラスター爆弾除去のための援助額の10%以下です。これは地雷／クラスター爆弾を除去する場合はプロジェクト・フォーメーションに要する費用を機材製造メーカーが負担しても機材の売上額から元が取れるのに対して、犠牲者支援のためのプロジェクト・フォーメーションの費用を負担する組織がないという構造的な欠陥があります。当分、問題提起だけで、ODAの援助方式を変更する以外に道はなく、犠牲者支援はNGOの力に頼る他ありません。

JCBLは以上のように人道的な立場から、民間人に受け入れがたい被害を及ぼす対人地雷／

クラスター爆弾の廃絶を訴え、これら悪魔の兵器がない世界を目指して活動をやってきました。今年は創立 15 周年です。それを祝うイベントを来る 2012 年 11 月 16 日（金）に、近いうちにオタワ条約に参加する用意が整うポーランドの大使館のご好意で、同大使館のホールで開催します。15 年間の JCBL の軌跡を振り返り、懇親会では、ポーランドのワインを飲みながらポーランドの女性歌手のライブを楽しみます。

イベントの詳細については JCBL の URL:http://www.jcbl-ngo.org/で検索の上ご参加下さい。大使館の警護のため、事前の申し込みを頂いて、入館者のお名前を登録しておくことが必要なのです。

特別寄稿　真藤語録（その１０）

事務屋・技術屋これは方便、企業人たる前に社会人たれ

本会顧問　石井　孝

【元ＮＴＴ社長 真藤 恒氏の語録】

ホワイトカラーの生産性を上げるということは、人を減らして生産性を上げるという意味ではない。いろいろな部門で経験を積んだ人たちが皆、有効に働くように事業のレパートリーを広げていくという形で、生産性を上げることができるか否か、そこに発展のカギがある。たとえば、いま持っている技術の中に、うまくやればかなりの事業になる種がたくさんあるとすれば、それを取り上げて、一つの事業として成り立たせる。これが生産性向上の最も有効な方法である。

事務屋は事務的な部門で何をなし得るかというような、最初からワクをはめた考え方は捨てたほうがいい。もちろん、その他に先行投資の仕方とか、経営をどっちの方向に向けるべきかとか、いろいろあるけれども、とにかく先を見ての仕事というのは、技術系統でない人のほうが、素養さえ基礎にあれば向いている。

基礎的な素養の中には、歴史を見る目というものが大切である。人文科学の勉強によって、歴史を正しく評価しながら進めることが大切で、一番正しいと思う。歴史をわすれ、歴史を無視した社会行動は何一つ通用しない。政治も経営も、技術だって皆成り立たない。大体やっていることが歴史の一コマなのだから、歴史の中に一貫して流れている変化の法則を、おぼろげながらでも身につけていく、体得する、それが非常に大切である。史観の裏付けに欠けた行動は宙に浮いてしまう。事務屋とか技術屋とかでなく、人間として要は、企業人であるより前にまず社会人であることを忘れてはならない。

【石井　孝氏の一言】

本件に関しては、全くご尤もで、コメントすべき何ものもありません。真藤哲学の基本ではないかと思います。真藤さんの慧眼、鋭い先見性もこしたバックボーンあっての事でしょう。

「大体やっていることが歴史の一コマなのだから、歴史の中に一貫して流れている変化の法則を、おぼろげながらでも身につけていく、体得する、それが非常に大切である」

我々も、社会の中で生かされ、生きている一人の人間として、及ばずながら歴史の一こまを創っているという自負と自覚を持ちたいものです。

特別寄稿

三度目のバンコク勤務

（株）ミライト・テクノロジーズ
アジア・パシフィック駐在事務所長
（当会会員）山川　博久

三度目のタイ王国バンコク勤務をしている。

一度目は 1993 年から 1995 年に、NTT の初めての大型海外投資事業である TT&T の事業立上げに従事した。サポート設備部長として、ラインマンセンタ（OPMC）、研修センタ、電力設備等の建設を担当したが、これらの設備は現在も重要拠点等として活躍している。また、社内サッカー部を創設したり、数箇所で日本語教室を開設したり、タイ文字の読み書きにも本気で取り組んだ。今、タイ文字を見ても何となくわかる部分があり、精神衛生的にも心地よい。

二度目は 2000 年から 2005 年に、同じく TT&T に副社長として派遣された。まず、TT&T 社長交代に向けて、候補者面接・選定等を一手に引き受け、主要株主を駈けずり回って合意を得て、ピシット社長（博士、前財務省副大臣）を選定した。また、本誌読者の中には、TT&T はずっと大赤字と思っている方がいらっしゃると思われるが、私の任期中に V 字回復し、2 年連続単年度黒字を達成した（図 1）。前任者（平良さん）のご苦労とタイ経済の急回復のおかげであるが、TT&T 社員に久しぶりにボーナスが支給され、いつも笑顔の社員たちがさらに喜んでいたことを思い出す。バンコク盲学校での日本語教室を再開したり、僧侶として午前 2 時起床、托鉢、一日一食などのタイ仏教修行（夏季休暇 10 日間）をしたり、英国第 3 の歴史を有するダーラム大学の経営学修士(MBA)を取得したり、有意義な私生活も過ごすことができた。

2005 年に日本帰国後の TT&T の動きを簡記する。2008 年 4 月、TT&T は 2 回目の破産・更生を申請したが、破産裁判所は TT&T 自体を更生計画人と認めず、(TT&T 最大株主ジャスミンの圧力で) 2003 年に退任していたピシット前社長が設立したコンサル会社を更生計画人に選定した。その結果、ジャスミングループはかなりの痛手を受け、株主比率が約 2%となり、TT&T と対抗する会社に転換している。昔の TT&T 人財はかなり流出したが、チャムナン・ヤイが CEO、チャムナン・レックが VP などで健在である（写真 1）。

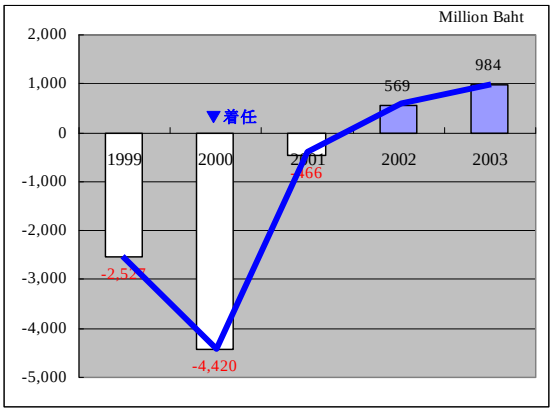


図 1　TT&T の当期損益

写真 1　TT&T で旧友と再会

一方、私自身は（株）コミューチュアに入社し、神戸支店長、安全品質管理本部長など経験したが、ミライトグループの経営統合に伴い、海外事業の展開・強化が図られることになり、2011 年にマニラに転勤、フィリピンの現地法人社長及び豪州の現地法人会長兼 CEO を経験した。マニラはあまり安全でない場所もあるが、アパート周辺で走りこみ、妻と一緒に現地のマラソン大会（3 キロの部）に出場したことは楽しい思い出である（写真 2）。

写真 2　マニラでマラソン大会出場

写真 3　事務所が入居しているビル

さて、三度目のバンコク勤務。「三度目の正直」とは、「占いや勝負で、はじめの一度や二度は当てにならないが、三度目は確実であるということ。転じて、物事は三度目には期待どおりの結果になるということ」（デジタル大辞泉）である。一度目、二度目も上述のように、いろいろと楽しく、期待どおりであったと思うが、今回のバンコク勤務はもっと楽しく、有意義になるのかもしれない。わくわくしながら、またギラギラと闘志を燃やしながら、毎日を過ごしているところである。

皆様、バンコクにお越しの節は、いつでもお気軽にお声をかけていただければ幸いです（写真 3）。

（メール yamakawa.h@miraitph.com）

現地活動の思い出から

カトマンドゥ便り（その２）

当会幹事　須山　勝彦

須山勝彦さんによる「カトマンドゥ便り」は今回が 2 回目です。全文は 28 ページに及ぶ労作ですがこの種の会報に全文を掲載するのは難しいことも事実です。

全文は 24 項目に分けられておりますので、著者の承諾を得て、項目を抜粋し 3 回連載させていただきます。全文をお読みになりたい方のために、３回目の連載終了後全文を当会のホームページに掲載させていただきます。（編集担当）

再び授業に挑戦

2 月に入り、学問の神様サラスワティ（日本の弁財天と同じ）の誕生日を祝う式典が学校でありました。シュリーパンチャミー（神の第 5 日）といい、この日を境に春が萌してくるようです。学校も冬休みが終わり、授業が再開されました。電気工学の実験が一向に始まらないことに業を煮やした校長先生が自分でやると言い出しました。今までの担当の先生を他に回し、大学の研修から戻ったばかりの若いバジュラチャルヤ先生を充て、私と 3 人でやることになりました。とはいっても実験装置がまだ 1 台しかなく、実験材料やテキストも間に合わないので、最初の授業は装置の使い方をデモンストレーションする事になりました。授業は金曜日の朝 6 時から、夜明け前のまだ暗い道を自転車を走らせ 5 分前に学校に着きました。6 時丁度にバジュラチャルヤ先生がバイクでやって来ました。しかし学生は誰も来ません。食堂でチィヤ（砂糖のたっぷり入ったミルクティ）を飲みながら待っていると、6 時半頃最初の学生が来ました。バジュラチャルヤ先生がなぜ時間に来ないのかと問いただすと、早く来ても先生が時間通りに来ないといいます。建前と実際が違っているのは途上国で（日本でも？）よくある話です。

校長先生の訓示のあと、クラスを 2 つに分け、実験装置で波形を観測するデモを私がやりました。1 通り終わり、同じ説明をもう 1 度やるのはしんどいなと思っていると、今まで横で聞いていたバジャルチャリラ先生が今度はネパール語で説明を始めました。私が言った通り、細かい注意事項も漏らさずに説明するのには驚きました。

授業のあと、学科主任のアヤル先生と今後の授業計画について相談しました。彼は波形観測の実験はやって欲しいが、他の基本的な実験は自分たちでできると妙なことを言い出します。授業計画と違うけど誰がやるのかと聞くと自分でやると言います。実験テキストを作る必要があるのではと聞くと、それより彼が黒板に指示を書き、後で学生のノートの中で模範的なものを採用したほうが実際的なテキストができると、一見もっともらしいことを言います。実験は理論を検証するために大事だと言うので、それは考え方が逆だ、実際の現場でどの理論を使えるか応用能力を養うためだと説明しました。先生がたに自分で実験をやって経験を積んで貰いたいというのが私の思いですが、大学卒のエリートは手を汚す仕事をやらないという階級社会の伝統がまだ根強く残っているようです。

JICA に申請していた予算が下り、実験に使う測定器が入ってきたので、今がチャンスと考え、私の実験授業の運営法を形で見せることにしました。まず実験室の整備ですが、電気科部長のタマルカール先生に頼んで、各実験テーブルに天井から電源を配線して貰いました。(そんなことと思うでしょうが、この国では電源コンセントの種類がいろいろあり、コンセントが合わないと電線を直接差し込みます。こんなやり方を学校で教えると電気の安全教育に問題だと言って改善を頼んだわけです。) 新しい測定器を資材倉庫に入れるとなくなると校長先生が心配し、ロッカーの鍵を取替え、私が管理する事になりました。

アヤル先生に次回は 3 グループづつ 2 つの実験を平行してやるよと言うと、教室を 2 つ使わないとできないのではと聞きます。いやできる、そのためにテキストを作っているんだと答え、授業に臨みました。学生は前より早く来るようになり、ケーブルの不足や測定器の故障などトラブルもありましたが、初めて実験授業らしい授業ができました。(2002/3/9)

床屋の値段から経済を考える

ネパールの床屋は道端でしゃがんで営業しているもの、街中に 3 畳位の店を構えているもの、ホテル内の高級店とありますが、私は中間の街中の店を利用しています。入口には薄汚れたレースのカーテンが掛かっており店に入るのに少し勇気がいりますが、待たずにすぐやってくれること、30 分で終わること、そして何よりも 30 ルピー(50 円)と安いことが気に入っています。初めて行ったときは立派な口ひげを蓄えたインド系の恰幅のいい店主が日本のものより大型のハサミをカシャカシャと動かし、耳を切られるのではないかとひやひやしましたが、腕は確かなようです。ただ血液による感染症が怖いのでカミソリを使うのは断っています。

さて本題の床屋の値段ですが、日本では 1 時間位かけいろいろサービスしてくれますが 3000 円はとられます。時間が倍であることを考慮しても 30 倍の開きです。髪を切るという技術に対する対価がなぜ 30 倍も違うのでしょうか？もちろん物価が違うので、ネパールの人がそれだけ貧しいわけではありません。しかし国と国との経済の力関係はこうなっているのです。実は私がネパールで生活できるのは日本の経済力のおかげで、できるだけ質素な生活をしようと心がけていますが、それでもネパール人から見ると大変贅沢な生活をしていることを告白します。

戦後の高度経済成長を支えてきた私たちの世代は、アメリカを目標に一生懸命働きました。だれにでもチャンスがある自由競争の仕組みはすばらしいと思っていました。しかしよく考えてみて下さい。競争には必ず勝者と敗者があります。一握りの勝者だけが繁栄する仕組みが本当にすばらしいでしょうか？いやそんなことはない、日本も豊かになったではないか、皆が切磋琢磨することにより、経済が発展し、皆が豊かになれるのだと、反論されるかもしれません。しかし、その影には多くの途上国が貧しいままでいるという現実があります。

資本主義経済を否定するわけではありませんが、今の経済の仕組みでは技術や資本のある先進国が絶対優位で途上国との格差がますます開いてしまいます。そろそろ限界が見えてきた地球の資源を有効に使うには、競争原理ではなく、協調し分け合う新しい価値観を作っていかなければいけないのではないでしょうか？

１年前ネパールに来た当初、“ネパール語には効率という言葉がないのですか”と聞いた

ことがあります。計画や段取りなどと言うことを考えずに、目先のことを黙々とやっているネパール人に苛立ったからです。しかし私たちが考えるのは経済効率で、国内の山林を省みずに東南アジアから木材を輸入し、中東の石油に頼った火力発電でエネルギーを賄い、賞味期限が切れたからと言って食料をどんどん捨てているのです。これでは資源の利用効率が良いわけがありません。一方、ネパールは外貨が乏しく外国から資源をあまり買えないという事情もありますが、エネルギー資源の 85%はバイオマス(薪)で、電気は水力発電、食料のほとんどを自給しています。私の家のシャワーは太陽温水器だけで電気ヒーターは付いていません。冬場の曇りの日はシャワーが熱くならずつらいのですが、ネパールの庶民は昼間洗濯場で水をかぶっていることを思い、我慢しています。人口が増え、農地転用により森林が減っているという問題はありますが、再生可能エネルギー利用に関して、ネパールは先進国なのです。　(2002/4/6)

メールマガジン配信登録」のおすすめ

本会顧問・JICA 青年海外協力隊事務局からのおすすめです。
SV および JOCV 募集案内等情報満載の「メールマガジン配信登録」をしてください。
きっと皆様のお役に立つと思われます。(編集担当)

手順は次の通りです。

① Internet Explore で「JICA」を検索
② 「JICA-国際協力機構」を選択し HP を開く
③ 右手の JICA ボランテイアをクリック
④ 情報満載メールマガジンをクリック
⑤ メールマガジン配信登録をクリック
⑥ 所定の個人情報を記入
(http://www.jica.go.jp/volunteer/index.hotmail)

会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。

それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきますようお願い申しあげます。

送付先は、編集担当　加藤隆(kato2415@jasmine.ocn.ne.jp) ,または
村上勝臣(katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp)までお寄せ下さい。

編集後記

・当会幹事 肥後　照雄さんから巻頭言をいただきました。氏の提唱する「グローバル教育～リーダー・人材を育てる～」講座開設に賛同いたします。企業の若手社員の草の根的な海外ビジネスを担いうる人材の育成は急務で、当会も緒についたばかりですが取り組んでいるところです。昨今、日本からの特にアジア諸国への投資が急増しております。その要因の一つに、日本の製造業は国内の需要に限りがあるので海外進出を企てているようです。更なる日本の空洞化が進み､特に新卒者は国内での就職機会が少なく海外流出の傾向もあります。いずれにせよ、この国際化する労働市場の中で、自己の市場価値を高めなければなりません。

・　ミライト・テクノロジーズの山川博久さんから寄稿をいただきました。現在では海外における通信エンジニアリング拠点は貴重な存在かと思います。氏の今までの活躍に敬意を表すとともに、日本の海外における活性化のためにも、タイのみならず今盛り上がっているアジア・パシフィックの各国で大いに活躍されますようエールを送らせていただきます。（以上　加藤）

・北川康弘さんから JCBL の活動の紹介をいただきました。北川さんが 2004･2005 年 JCBL のイベントでカンボジアを訪問された際、私は SV で滞在していて、カンボジアトラスト運営の義足製作学校の卒業式などを訪問され、その活躍に感銘したものでした。そして今回 JCBL の活動が更に発展してクラスター爆弾使用禁止の運動も進められているとのこと、今後の活躍も期待したします。

・須山勝彦さんの「カトマンドゥ便り」第２回目を掲載させていただきました。前回から続いた技術訓練学校の一連の授業の話は途上国での授業の実情に共感しました。カンボジアでもネパールと同様、屋外の木陰で営業する床屋もありました。私は２年間何時も町中の床屋に通いましたが何時も私を扱った親父さんは頑なに手動のバリカンを使っていたことを思い出します。第３回目も期待しています。（以上村上）

総編集長：ICT 海外ボランティア会　事務局長　加藤　隆
編 集 長：ICT 海外ボランティア会　報道部長　村上勝臣
発　　行：ICT 海外ボランティア会　（メール：sv@info.nttob.org/）